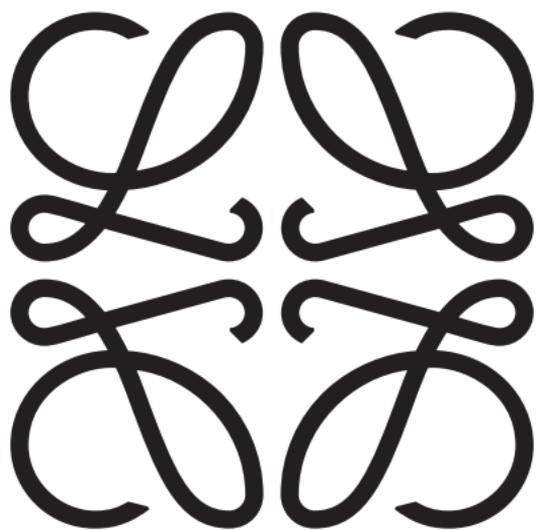


Danielle
Steel



The Affair

情事

ダニエル・スティール

鴻巣友季子訳

ローズ・マッカーシーが入ってくれば、決まって部屋じゅうの視線が集まった。身長はゆうに百八十センチ、背筋のすつと伸びた佇まい、どこから見ても非の打ちどころのないスタイル、長くて優美な脚、真っ白な髪は顎のラインで切りそろえて丸みのあるカットに仕上げられていた。その射のような碧眼はなにも見逃さない。柔らかながら選り抜いた雄弁な言葉を二つ三つ、彼女が発するだけで、だれもが震えあがったし、一方、彼女に惜しめない賛辞が送られれば、若い社員たちはたちまち慰められ、心はずませた。そう、ローズはこの二十五年にわたり、〈モード・マガジン〉の伝説的編集

長の座にあった。優しく、そつなく、とてつもなく有能。ローズ・マッカーシーは、このうえない包容力と裁量でもって、この雑誌をしっかりと支配下においてきたのだ。ずば抜けた判断力、雑誌に利潤をもたらす賢明な決断、深い献身とファッション愛で界限に知られていた。

装いには、どこかに必ずアクセントを添えた。ちょっといわくありげな、ひとの目を引く装身具を。たとえば、ヴェネツィアの高ぼけた埃っぽい宝飾店で見つけた指輪、モロッコのバザールで買ったプレスレット、なにやら見かけないタイプのスカーフやピン。エレガンスが身に沁みこんだ人だった。ふだんの服には黒が多かったものの、ときおり鮮烈な彩りで周囲を驚かせた。並の人間には逆立ちしても真似のできない着こなしだった。朝の九時に——もちろん九時でなくても——登場する彼女の装いのパーフェクトさときたら。オフィスに着いた瞬間にぼつちりと目覚めて弛みなく、その明敏な動きは一日じゅう止まることがない。社員をびしびし働かせて、最上の結果を望むが、自分に対しては、だれよりもはるかに厳しかった。

一筋縄ではいかない魅惑的な生い立ちの持ち主だ。父親はひきもきらず本を出すような権威あるイギリス人歴史学者で、オックスフォード大学で教鞭をとったこともあった。ローズはロンドンで生まれ育ち、父親の強い勧めで自身も二年間だけオックスフォード大に通ったが、結局好きになれなかった。母親はイタリア貴族の大一族の末裔で、イタリアルネサンス絵画の専門家として名の通った人だった。ローズの娘たちは母をからかって、「ママは家ではイタリア人、職場ではイギリス人なのね」と言ったものだ。これには、一理ある。ローズの母は感情豊かな人だったが、父はそれとは対照的だった。ローズは両者から学びつつ、ひとりっ子として、両親の愛情と支援を一身に受けてすくすくと育った。ローマに住む母方の親戚も心温かな人たちで、そちらにも好んでよく遊びに行った。

ローズはイタリア語、フランス語、英語を流暢に話すようになり、オックスフォードに二年通った後にソルボンヌ大学に一年通い、こちらのほうがはるかに気に入った。ファッションへの情熱と天性の勤が顔をのぞかせたのは、パリに暮ら

していた二十歳のころだった。ロンドンにもどるとイギリスの有名雑誌でインターンをやり、何か月かのうちにアメリカ人銀行家ウォレス・マッカーシーと恋に落ちる。二十一歳のとき、後先考えずに彼を追ってニューヨークへ。〈ヴォーグ〉で下っ端の職を得たところから、昇進の階段を苦勞してのぼり、三十を迎えるころには編集委員になっていた。それから十一年後の四十一歳のとき、〈モード・マガジン〉の編集長のポストをオファーされ、この雑誌にいまのような大成功をもたらしたのだった。

ローズこそが〈モード・マガジン〉の魂にして精神であり、彼女はつねに水準を高めにおいていた。彼女が編集長を引き継いでから二十五年、〈モード〉はファッション界の最有力誌の一つとして君臨してきた。この成功がローズのおかげであることには間違いがない。夫のウォレスも妻を誇りに思い、彼女のキャリアには常時、協力的な姿勢をとってきた。どちらにとっても結婚生活は大切なものであり、ローズにとっては揺るぎない最優先事だった。編集部ではばりばり仕事をこなすローズも、家庭では愛情あふれる妻だった。

ローズはイギリス育ちの人らしく、仕事の場では私生活について一言も口にしたことがない。たとえ夫が人生の中心にいても、編集部内ではウォレスについて触れることは減多になかった。ファッション誌の編集者として着実に出世の道を歩むなか、四人の娘を出産し、この子たちこそが生きる喜びだと身内には話していた。しかし日々の仕事場で子どもを話題に出すことはほとんどなかった。ローズは徹頭徹尾プロフェッショナルであって、産休も最小限しかとらず、準備万端で職場に復帰した。

産休明けも以前と同じようにスリムでスタイリッシュで、髪の毛の乱れひとつなく、雑誌の仕事に集中する構えができていた。

一方、結婚生活に波風はなく、四年前にウォレスが亡くなるまでつづいた。

ローズの私生活のことや、理不尽に短かった闘病期間を経てウォレスが急逝したときのひどい傷心ぶりを仮にも知っているとすれば、忠実な助手のジェン・モーガンだけだった。ジェンは〈ヴォーグ〉時代の部下で、ローズについて〈モード〉

に移り、いまでも助手を務めている。夫を亡くした後のローズはいつにもまして娘たちにびびったり寄り添うようになり、頻繁に電話をしたが、例によって編集部に来ると頭のなかは〈モード〉一色になり、脇目もふらず仕事に没頭した。仕事に情熱を燃やすのはむかしからのことだが、ウォレスが逝ってからは、仕事がある種の避難場にもなっていた。かといって仕事と私生活、このふたつが彼女のなかで交わることはなかった。驚異的な成功を手にした雑誌の育ての親である自分と、四人姉妹の家族を育ててきた自分。

四人の娘はそれぞれ違った個性を見せながらいまでもたいへん仲が良く、母親のこともよく慕ってくれる。そんな娘たちも、大人になった彼女たちが歩んでいる道も、ローズは誇らしく思っていた。

以前は夫と子どもたちのために時間をつくっていたが、夫に先立たれ、娘たちも成長して手を離れると、ますます仕事に打ちこむことになった。編集部に寝泊まりしているのかと思うぐらいに。朝、編集部員たちが出社すると、たいいもう来ている。早起きして頭を働かせなきゃと言い、夜は夜で

毎晩遅くまで残った。長年、自分の時間を夫と子どもたちと仕事のために小分けしてきたけれど、いまは他に注意が逸れることもないから、「仕事」はローズの時間の大半を独占することになった。子どもたちのことは相変わらず可愛いが、彼女たちも自分の生活で忙しく、それはあるべき姿だと思う。子どもたちのやり方に口は出さないし、時間を要求するようなこともしない。ローズは朝から晩まで〈モード〉の仕事を詰め込んだ。まさに〈モード〉を生き、〈モード〉を呼吸する毎日だった。どんな細かい点にも、問題にも、全力であたる。ローズ・マッカーシーの目はなにも見逃さない。

その五月の朝、ローズはクールな笑みを浮かべてミーティングの一同を見わたした。その場には、クリエイティブボード（*品質や顧客満足度などをチェックする部署）の面々もそろっていたし、各セクションの編集デスクたちも出席していた。まずは、このかたがたの意見を拝聴するが、最終的にはローズの考えを通すのが常だった。彼らはみんな、だれかに訊かれれば「いや、ローズのやり方はフェアですよ」と答えた

だろう。自分の意見を押しつけるでもなく、しかし彼女が懇々と説くのを聞けば、この人の〈モード〉への勘に狂いはないのだと納得する。ローズはこの雑誌をまるでわが子のように愛しているんだ。生きて呼吸する人間のようにね。ローズは推論でものを言っているんじゃない。なにが〈モード〉にとって最良か知っているのだよ。事実、この二十五年間、彼女がしたミスなんて片手で数えられるほどだろう。

今日は、毎年九月に発行される特大号の早期企画会議が行われていた。秋口のこの特大号は、メジャーなファッション雑誌ならどこも打つ企画だが、なんといっても〈モード〉の九月号には絶大な人気があった。毎回売り切れ、コレクターズアイテムになるほどで、ローズ編集長と並んで〈モード〉のシンボルだった。ローズはファッション界の伝説。きたる冬シーズンにどんなスタイルが流行るのか知りたくて、みんな〈モード〉を読む。メイク、健康法、ヘアスタイル、最新のファッション、すべて〈モード〉の教えにしたがって、ルックスもワードローブも一新する。〈モード〉はなにも押しつけない。読者の方が〈モード〉の提案を乞い求めるのだ。

編集部ではつねにシーズンを先取りして、毎月三か月は早めに企画を立てる。しかし、九月号はそれよりさらに取り掛かるのが早い。だれをカバー写真に起用するかに始まり、考えることや話しあうことが山ほどあるからだ。その先には、テーマだの、編集部からの提言だの、外注記事だの、『九月特大号』で注目されるために莫大な料金を払ってくる広告主たちの広告をどこに載せるかだの……。

カバーのモデルについては、前回までに候補が三人挙がっていたが、どの子もローズの心をくすぐらなかった。どれもこれもくたびれていて、わざとらしく見えた。この号のカバーには読者の想像力をとらえて、話題をさらうような人材がほしい。編集デスクのひとりが推していたのは、大物の女性ロックスターだった。ルックスは派手で良いけれど、これまで何度もカバーに起用しているから新味や意外性はない。つぎにオスカー女優を検討したものの、ローズとしてはもっと若い女性がほしかった。美容セクションの編集デスクは、「ファースト・レディをカバーにぜひ」と提案していた。善き行いと鋭敏な頭脳でアメリカ人の支持を勝ちとっています、と。本

人も弁護士であり、夫が大統領まで昇りつめたのですから、女性像としても最高峰でしょう。上等なアイデアではあるけど、とローズは考えた。彼女はいかにもレディという感じで、なんだか取り澄ましているし、スタイルはコンサバ。それに、ファースト・レディではファッション系のカバーストーリーを書くのはむずかしいのではないかと。

「あのかたはわたしと同年齢ですし」ローズは同意しかねるという顔で言った。「九月号のカバーには無理があるでしょう。またの機会にしませんか」

チームいち手ごわいシニアスタイリストのチャリティ・ベネットにはまた別の案があり、今日のミーティングでも開始早々にそれを提案していた。しょっちゅう意見のぶつかる相手だが、彼女なりのやり方や機転をローズは尊重していたので、チャリティはこれまでもそうとうアバンギャルドな企画をよくごり押ししていた。若いだけに発想が大胆。ローズが手綱をしっかりと握っているのに、そうそう過激な案は通らないが、漆黒の髪に象牙色の肌、シャープな顔つきのチャリティは、編集長と真っ向からやりあうことも恐れなかった。ローズは

彼女のそういうところを買っており、その意見には耳を傾けた。個人的には好きになれない相手でも、チャリティがびりりとしたスパイスをまぶしてくれる論説記事には、すてきな目覚まし効果があり、こういう記事のおかげで〈モード〉は時代の先端を走り続けていられるのだ。

「パスカル・ソロンはどうでしょう?」というのが、チャリティの提案だった。「二十二歳で、見た目はゴージャスだし、最新の出演作でカンヌ映画祭の賞を総なめにしたところです。それに、映画の原作者のニコラ・バトーと熱愛中ですよ。彼のほうは四十二歳で、ソロンとは二倍も年の差があり、カンヌでもふたりの話題でもちきりです。バトーは彼女との関係を大っぴらにしています。もちろん既婚者。フランスきってのベストセラー作家。ソロンはこの映画でオスカーも固いというもっばらの評判です。その前のゴールデングローブ賞は言うまでもなく」

ハリウッド外国人記者協会が与えるゴールデングローブ賞は、しばしばアカデミー賞の前哨戦になる。

「若いし、手垢がついてないし、こんなにそそるルックスの子っ

て見たことはありません。セクシーで、あどけない色気があるんですよ。彼女と並んだら、ロリータなんてミニーマウスに見えるわ。編集長、いかがですか?」チャリティがまっすぐに見据えても、ローズは無表情のままだった。静かに考えているのか、しばし反応がない。彼女は自分の考えをなかなか口にせず、顔色が読めなくなることがある。

「考えてみましょう」よくそんな素っ気ない答えが返ってきた。提案に気に入らない点があるとスフィンクスのようになるのが、ローズという人だ。でも、彼女をよく知る者が見れば、これは気乗りがしないときの態度なのだ。みんな知ってのとおり、ローズを乗り気にさせない限り企画は通らない。ローズは信念に基づいて決断をくだす。

「うちが捕まえなきゃ、〈ヴォーグ〉に持っていかれますよ」チャリティはたたみかけた。こう言えば、よそに使われないうちにパスカルを押しさえておこうという気になるかもしれない。ローズの考えならわかっている。〈モード〉がゴシップ誌に身を落とすことはあってはならないが、スターの私生活に読者の心を刺激する面があるなら軽く触れるぐらいは構わないと

考えている。ただし、やりすぎは禁物。ローズには確固たるルールがあり、編集デスクたちもその境界は尊重すべし。どんな内容でもファクトチェックの確認がとれて初めて、ローズのゴーサインが出るし、読み捨ての安っぽい論説が〈モード〉に載ることは断じて許さない。くだらない下衆なゴシップはローズの毛嫌いするところだ。〈モード〉はファッション誌であって、スターたちのときに見苦しい私生活を覗くことは趣旨ではない。有名人なら、秘密の一つや二つあるのがふつうでしょう、と。

これまでチャリティ・ベネットは、ローズが引くこうした境界線を突破しようと奮闘してきた。ローズもいいかげんうんざりすると、容赦なく提案を突き返す。今回はとくにコメントはなく、唇をきゅっと引き結んだだけだった。これは、「下がってる」という意味の警告のサインだと、一同理解した。「有名作家と付き合っているぐらいで、うちが取り上げるわけにはいきません」ついにローズのご意見がくだった。「九月の特大号が出るころには、彼と別れているかもしれないし、映画も公開されたばかりでしょう。いまから四か月後には、彼

女、別の男性に鞍替えしているんじゃないかしら。そうならうちが乗り遅れたみたいで、いい笑いものですよ」

周知のとおり、ローズはゴシップ記事が大嫌いで、できるだけ避けるようにしていた。〈モード〉の仕事というのは、話題の人のキャリアやライフスタイルの方向性について真面目な記事を書いたり、インタビューしたりすることであり、既婚男性との不倫ぐらいで——いくら相手が有名人でも——パスカルをカバーに起用する気にはなれなかった。とはいえ、パスカル・ソロンが汚れ役をみごとに演じきって、一夜にしてトップスターになったのも確かな事実だった。ニコラ・バトーはこの映画の共同プロデューサー兼ディレクターでもあり、空き時間にソロンの演技指導もこなしていたらしい。この新進女優からすばらしい演技を引き出してみせた。ふたりの不倫については、チャリティが話題に出すまでローズは聞いていなかった。こういう色恋ネタやうわさになると、チャリティはがぜん張り切る。でも、カバーストーリーに欲しいのは、ファッションの話題であって暴露話ではない。

「ふたりの関係、編集長が考えるほどあっさり終わらないか

もしれませんよ」チャリティは食いさがあった。「ソロンが妊娠しているといううわさがあるんです。そうすると、九月号のカバーストーリーには、どんびしゃでですね」彼女が澄まして言うと、別の編集デスクが目をまわしてみせた。

「ちょっと、またお腹の大きなスターのヌードをカバーに載せるのは勘弁してちょうだい。それだったら、まだファースト・レディのほうがましよ。たとえ、ネイビーブルーのスーツに、ボウタイつきの白ブラウスだとしても。妊婦のスターは、二度は使えません」ローズの声には苛立ちがにじみだしていた。

「いま撮れば、目立ちませんって」チャリティが断固とした態度で迫っても、ローズはもう別のデスクの提案リストに目を走らせていた。とはいえ、そこにも、これぞという候補はいなかった。

「ミカエラ・リムはどうかしら？」ローズは気のない声で言った。リムも若い新人女優で、新作映画でたいへんな好演を見せたばかりだ。

「彼女は、来年で」チャリティが反論した。「まだ知名度がありませんよ。魅力で言ったらパスカルには遠く及ばないし、

それに若すぎませんか。十九歳になったばかりでしょう。うちの九月号に使うには、もうちょっと年季が入ってからでないと」ローズはうなずいて同意を伝えた。もっともな言い分だ。

「考えてくださいよ。ニコラ・バトーって、クラツとくるじゃないですか。妻を棄ててパスカル・ソロンとくっつけば世界を騒がせるニュースになり、うちの九月号は無敵の特ダネ号になる。そのチャンスを逃したくないんです」チャリティはしぶとかった。確かにパスカルは蠱惑の美女だし、どんな媒体でも映える素材であるのは間違いない。考えなくてもわかることだ。それでも、ローズは起用する気になれなかった。

「でも、男の不実をうちが承認するような形になるわね。妻を裏切るような男性を。ここはアメリカなのよ、チャリティ。アメリカ人は不倫をする男を好まない。フランスとは違うの」チャリティは〈モード〉に来る前はフランスのファッション誌で働いていたが、その雑誌は内容がゴシップ誌すれすれだったのだ。ローズは冷たくそう言うと、無表情のまま、パスカルをカバーに使おうと頑張るシニア・スタイリストに銅青色の目を向けた。「うちはゴシップ誌でも、映画雑誌でもありま

せん」そう釘をさす声は厳めしかった。「そういうことを書きたてる雑誌はほかにいくらでもあるでしょう。うちがどういう雑誌か、忘れないようにね」憤懣やる方ない顔のチャリティを尻目に、会議は進行していった。この先の数週間で、特大号について決めなくてはいけない細かい懸案事項が山積みだった。

この日、ミーティングが終わってもまだカバーの件は結論が出ていなかった。

「バターの浮気はいまに始まったことじゃないですよ」ミーティングの終わりごろに、またチャリティが言いました。「結婚相手がだれだったか忘れちゃったけど、ふつうっぽい、でもわりと見栄えのいい女性でしたよね。作家かジャーナリストか、なにか……」

「あの人は名の通ったインテリアデザイナーよ」ローズが指摘した。「それに、ふたりには幼い子どもたちがいる。やはり、このストーリーは好きになれないわね」ローズが立ちあがると、それを機にみんな自分の仕事にもどっていった。二時間つづいたミーティングでは、カバー以外では、だいたい進

捗があった。〈モード〉の特大号には無数の構成要素がある。最終的にはローズが決断をくださのだが、彼女ならどんなときも雑誌にとって最良の判断をしてくれるという信頼感があった。私見は脇において最良の道を見抜く彼女の勘がはずれた例^{たが}いはない。だから、ローズはだれからも敬意をあつめるのだ。その点はチャリティも同じだったが、今回の件はどうにも納得できない。パスカル・ソロン以外の候補者は、どれもこれも退屈。そう思った。チャリティはシニアスタッフのなかでは最年少で、彼女が持ちこんでくれる刺激をローズはたいてい歓迎したが、今回ばかりは頂けなかった。

ミーティングが終わると、ローズは足早に会議室を後にした。デスクには、メールのプリントアウトやメッセージが山ほどたまっているだろう。助手のジェン・モーガンがさばける分はさばいてくれるが、結論を出すのにローズの返事待ちの用件も多かった。そう、トルーマン元大統領の「盥回^{たらい}しはここで止まる（*仕事の最終責任はわたしにあるの意）」という

名言のとおり。ローズはそのことで文句を言ったことはない。彼女がこの業界随一の編集長であることも、その大胆な編集方針も、ライバルたちですら認めている。ローズは女性の人権の強力な擁護者でもあった。高潔さと正直さを重んじた。いや、それはローズにとって生死に関わるぐらいの問題で、彼女のあらゆるインタビューや論説記事の核心にはその二つが必ずあった。

ローズはミーティングの資料の厚い束を胸に抱えながら、ジェンのデスクの脇をろくに振り向きもせずすっ飛んでいく。一日の終わりまでびっしりとアボが入っている。「カバーは決まりました？」ジェンが微笑みかける。「まだよ。これから部外秘の電話があるの。十五分か二十分ぐらい。それまで、こっちに電話はつながらなくていい？」ローズは指示を出して自分のオフィスに向かっていくと、ドア口でふと立ち止まった。近くの席からジェンが言った。「デスクの上はすでに悲惨な状態になってます。あと二十分、放っておいたら埋もれちゃいますよ」「仕方ない。この電話はしないわけにいかないよ。嵐が起

きそうなの」ローズはどんな“嵐”なのかは説明しなかった。

ジェンは片眉をつりあげたものの、質問はしなかった。すべきでないし心得ており、訊いたところで、どのみち答えは返ってこない。ローズは信頼のおける助手にさえ、滅多に仕事の内緒の打ち明け話などしないことも承知していた。「了解、侵攻軍を食い止めておきますよ」ジェンはそう請けあった。彼女はじつに有能な助手で、ありがたいことに、編集長が抱える膨大な細かい用件をととも上手く処理してくれていた。

ローズは自分のオフィスに入っていくと、ドアを閉め、デスクについた。ジェンの言葉に誇張がないことは、ひと目でわかった。メッセージやメールのプリントアウトその他の書類がデスクにうず高く積まれている。それは見ないようにしながら、なじみの電話番号にかけようとした。

でも、この時間帯だとオリヴィアにつながるわけがないと思い、電話はやめておいた。彼女は最近三十九歳にして上位裁判所判事に任命され、いまごろは法廷で審理中か裁判官室で弁護士らと協議中だろう。四姉妹の三番目で、ほかの子たちと同様にローズには自慢の娘だった。その子がいま

では、とてつもない重職についている。夫のハーレー・フォスターは連邦裁判所の判事で、オリヴィアより二十一歳年上。もとは、彼女が通ったロースクールの教授だった。ふたりの間には十四歳になるウィルという息子がいる。きわめて堅気の保守一家だ。

長女のアテナは、真っ先に相談を持ちかけたい相手ではなかった。呑気というか達観しているというか、超前向き思考のカリフォルニア人生を歩む子で、「だいじょうぶよ、ママ」というのが——ちっともだいじょうぶでないときでも——決まり文句なのだ。母とも妹たちともまったく異なる考えの持ち主で、四人とは違う道を選んだ。四十三歳、十五年前からL.A.に暮らし、料理番組のシェフをつとめ、徹底したベジタリアンとビーガンのためのレシピブックを執筆し、ビーガンレストランを何軒か経営している。この十三年ほどは決まったパートナーと同居中。このジョー・タイラーもシェフで、自分もL.A.にレストランを持っており、かなり繁盛している。アテナの五歳年下だ。ふたりは結婚はしておらず、したいとも考えていない。こうして一緒に暮らして、いまのままで満足だと

いう。ふたりには何匹もの愛犬がいて、アテナは「わたしのベイビーたち」と呼んでいる。彼女によれば、「ベイビーはこの子たちだけでいいの」と。結婚は人工的な制度で、たいていうまく行かないし、自分は子どもを育てるのに向いていないそうだ。彼女いわく、子どもの扱いは得意だけど、折々にひとの家の子と遊んであげるぐらいで充分。わたしの「子ども人生」は、それぐらいの量がちょうど良いの。その点はジョーも同じ意見よ。

ローズは結局、次女のヴェニーシャに電話した。彼女は四十一歳、十四年前に自分の会社を立ちあげ、華麗な成功を手にしたファッションデザイナーだ。投資家の夫、ベン・ウェイドがしっかりした財務顧問としてついている。ヴェニーシャは幼いころから目立つ子で、クリエイティブだった。経営者としては怖いもの知らず、彼女が手がけたデザインは決まってセンセーションを巻き起こした。そのデザインは本人並みにいかれた奇抜なもので、言ってみれば、トレーラーパーク(*低所得者層が多く使用する)とパリとラスベガスを一緒くたにして強烈にしたような感じ。ローズは初めて彼女のデザ

インを見たとき「こんなもの、誰が買うんだろう？」と訝った。うちの娘と同じぐらい変人でエキセントリックな子でない限り……。ところが、ヴェニーシャの服は売れた。こんなふうに見せたいというあらゆる女性の夢に応えたらしい。イタリア製の高級生地にスパングルとヒョウ柄があしらわれていたり、ホワイトミンクとデニムを組み合わせて大真面目なシャネル風のショートジャケットに仕立て、ジーンズと合わせたり。高級品市場に出すために高値をつけると、驚いたことに、こうした商品は飛ぶように売れて、大ヒットとなった。会社を立ちあげて一年後、〈モード〉がヴェニーシャの特集記事を組み、〈ウォールストリート・ジャーナル〉もそれにつづいた。

母親と同じぐらいの上背があり——もっとも、黒髪に碧の目をした映画俳優ばりにハンサムな夫ベンはさらに背が高かったが——人目を引くルックスのヴェニーシャだが、毎朝五時にはジムに行き、自律と創造性をほどよく調和させていた。この両立が成功の秘訣だった。赤みがかった巻き毛の長い髪はたてがみのように奔放で、マスコミは「ゴールデン・ライオネス（*黄金の牝ライオン）」とあだ名していた。触れる

ものすべてを黄金に変えたというミダス王のような手と、ビジネスの才覚を持っているからだ。

学歴としては、デザインとアートの名門〈パソンズ・スクールオブデザイン〉の後に、〈コロンビア・ビジネススクール〉で修士号を取得していた。ベンとの間に、少々きかん気ながら愛らしい三人の子どもがいる。ジャックとセスという男の子二人、末っ子はインディアという女の子だ。ヴェニーシャはさらに子どもをほしがっていたが、いまのところベンは首を縦に振ろうとしない。ともあれ、彼女も母親と同じく、仕事、夫婦関係、母親業の三つをなんとか上手くこなしていた。一点、ローズと違うのは、彼女の暮らすニューヨークのタウンハウスが、いつも爆撃されたようなありさまだったこと。でも、ヴェニーシャは幸せそうだったし、子どもたちも同様だった。明るく快活な一家で、五歳の末娘は母親のクリエイティブな血を引いていた。「おおきくなったら、きらきらのスニーカーをデザインするおしごと」をしたいなどと言う。

ヴェニーシャはどんなに忙しくても、姉妹と母に相談されればいつでも時間をとって、うなるほど卓抜なアドバイスをし

てくれた。

電話にはアシスタントが出たので、ヴェニーシャにつないでほしいと頼む。数分後には、喜んで母の話を聞こうとする本人が電話口に出てきた。

「ごめん、ママ。デザインミーティングの最中だった。どうしたの？」ローズがこんな時間に電話をよこしたことはない。いつもふたりが電話で話すのは、仕事帰りのヴェニーシャがウーバーの車中にいるときだった。彼女が独りきりになれるのは、たいていその時だけなのだ。家に帰れば子どもたちの宿題を見てやる必要があり、そちらにずっと掛かりきりになる。

「ちょっと心配なことをミーティングで耳にしたものだから。あなた、なにか知らないかと思って」ローズの声は厳めしかった。

「今年はスカート丈がもっと短くなるって話？ わたしのデザインで、いまより短くしたら、お客さんたち逮捕されちゃう」ヴェニーシャは笑い声をあげたが、母の声の深刻さに気がついた。

「ニコラのことなんだけど……」彼は四姉妹の末っ子ナディアの夫なのだ。「自分の新作映画で主演している若い女優のパスカル・ソロンと付き合っているとか。ナディアからなにか聞いていない？ わたしは彼女とはここ数日、話していないの。このところ、九月号のことで手いっぱい。ただのデマだといいわね。先週、カンヌ映画祭で交際を公表したらしいけど、現地にはナディアも同行したんじゃないの？」

「そう、いつもはね。でも、いまマドリッドに家を建ててるから、今年には行かなかったか、一日二日だけしかいなかったのかもね。わたしもしばらくあの子と話してないな。お互い電話してるんだけど、すれ違いで。そういえば、グロッサリーで売ってるゴシップ紙の一面で、そんなスクープを見た気がする」
「あなた、自分で買い出しまでしてるの？」母は驚いた声を出した。「なにからなにまで自分でやろうってこと？」

「その日はわたしが子どもたちに食事をつくる番だったから、冷凍ピザを買いに寄ったわけ」ヴェニーシャの家はハウスキーパーもベビーシッターも雇っていたが、彼女は子どもたちの食事を週に一回はつくる努力をしている。

「ピザね、なら良かった」ローズを含めマッカーシー家の女性たちはアテナを除いて、みんな料理下手で名高かった。アテナはそのぶんを一人で補って余りある天才料理人だった。野菜が好きな人にとっては。

「ナディアがいないからって、ゴシップ紙がいつものガセネタを書きたてたんだと楽観視してたんだけど。で、ミーティングで耳にしたことって？」ヴェニーシャも心配そうな声になってきた。

「ニコラがパスカル・ソロンと付き合っていること、彼女が妊娠しているかもしれないこと」

「なにそれ。デマであってほしいね。そのうわさ自体、ハリウッドが仕掛けた映画のプロモーションなんじゃない」ヴェニーシャはそう願った。かわいい妹に悲痛な思いをさせたくない。ニコラももっと若いころは女遊びがあったけれど、最近はおさまっていた。フランス人だし、不倫もたんなる文化の一部なのかも。それ以上のものではない気がした。実際、そのことでナディアが愚痴ってきたこともないし、浮気されたと騒いだこともない。

そんなことを考えるヴェニーシャは、みずからデザインした服飾で全身を固めていた。ブランドのトレードマークであるヒョウ柄のカプリパンツ、ターコイズ色のスバングルがきらきらしたセーター、鮮やかなグリーンのエルメスのワニ革製ハイヒールに、エメラルドとダイヤモンドを鏤めたバングルを片腕いっぱいに着け、もう片腕にはごついターコイズが一つ嵌まったプレスレット、赤毛のたてがみは頭の高い位置でまとめられ、ダイヤモンドを嵌めこんだ箸を一本そこに挿していた。これはヴェニーシャの標準的な仕事着で、彼女が身に着けると不思議といい感じに見える。もともと容姿が良いから許されるコーディネートだ。なにしろ、ファッション界では偶然的な存在だし、彼女にしかできないスタイルを持っている。ティーンエイジャーのころから、自分の着るものには猛烈なこだわりを持ち、大人になってその道で成功しただけはある。

「デマであってほしいわね」ローズも強い口調で言った。「そのパスカルって子、九月号のカバーには却下してきたところよ。でも、これでは終わらない気がする。もしその不倫のうわさ

が本当だったら。妊娠の可能性は考えたくもない」
 「いかにもゴシップ誌がでっち上げそうなことじゃない、ママ」
 ヴェニーシャは母を安心させようとして言った。
 「これからどうしましょう？ ナディアがまだうわさを聞きつ
 けていないなら、わざわざ詮索して動揺させたくないし」ロー
 ズは考えこんだ。
 「ぜったい耳に入れてるよ。もうネットでバズっているかも」
 と言って、ヴェニーシャがパソコン画面をクリックすると、六
 本ほどの記事のヘッドラインと、パパラッチ写真が何枚か表
 示された。「少なくとも、ふたりが付き合ってるのは本当っぽ
 いな」ヴェニーシャは末の妹を不憫に思い、悲しくなった。
 「ナディアに電話してみてよ、ママ。わたしも後でかけてみる。
 あの子がなんと言ってるか教えて。まったく信じられないよ、
 ニコラがそんなダメ男だったとは。美しい妻と最高の結婚生
 活を手に入れて、互いに尊び、最高にかわいい二児に恵まれ
 ながら、自分の半分の年の駆け出し女優とバカな真似するど
 うはね。哀れな男。あまりにフランス的。これは、ちょっとし
 た火遊びとは違う。本当だとしたら、ナディアに対してあん

まりな仕打ちだよ」
 「あの子に電話してみるわね。あなたにも、また今夜かける
 から」母にそう約束されても、ヴェニーシャは愛する妹のこ
 とを案じて、仕事にもどるのにしばらく時間がかかった。一方、
 電話を切ったローズが末娘のことを考えていたのは、ほんの
 一瞬のことだった。

(一章完)

ダニエル・スティールによる新たな小説
 『The Affair』より抜粋。
 Copyright © 2021 by Danielle Steel

著者：ダニエル・ステイール

世界最高のベストセラー作家として広く認められているロマンス作家。世界69ヶ国・43言語で著書が出版され、累計発売部数は8億部にもものぼる。2002年、フランス政府により芸術文化勲章を授与。2014年にはフランス最高の名誉であるレジオンドヌール勲章を受賞。

翻訳：鴻巣友季子

翻訳家、文芸評論家。英語圏の現代文学の紹介と共に古典新訳に力を注ぐ。訳書に『風と共に去りぬ』（新潮文庫）、エミリー・ブロンテ『嵐が丘』（同）、ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』（河出書房新社）の新訳ほか。『熟成する物語たち』（新潮社）、『全身翻訳家』『翻訳ってなんだろう?』（筑摩書房）など翻訳に関する著書も多数。